

槐

かい

岡井省二創刊

平成26年9月号

平成二十六年九月一日発行 第二十四巻第九号 通巻第二七九号（毎月一回一日発行）
平成二十二年九月十八日第三種郵便物認可



神の領域

高橋将夫

風鈴の音風鈴が消しあひぬ
浮草の群れて失ふ身の自由
原爆忌孫子の代へ回す付け
七色の遺伝子を持ち七変化



日焼子に託す日本の未来かな
先頭に風奪はれしヨットかな
人に知恵鳥には翼夏の天
土用干人は宇宙の善玉菌
同じ世を生きて穀象虫と我
容赦なき時代の波やサーフィン
蛭追ひ神の領域まで入る



槐安集

水野恒彦

白地着て齡吹かるる橋の上
噴水の天辺に侏儒遊びぬる
光陰といふ遙かなるもの沙羅の花
螢火を追ひて遊行たりしかな
能面のふくみ笑ひや羽蟻の夜

加藤みき

雨脚のタップダンスや大夕立
祝言や花ともどもに桐伐られ
肖りたし雨また雨の雨蛙
花胡桃大阪城の風の中
青齒朶に囲まれてゐる留守の家



中島陽華

三毛過ぎる月下美人の夜となり
出し抜けの風鈴鳴つて歓喜天
迂回なり瀬田唐橋の藍浴衣
パイパンの見事揃うて半夏生
月山の雲の峰なり化楽天

竹内悦子

出雲より届く祝事小判草
福耳と言はれし嬰児や牛蛙
初夏のフランスパンと干ぶどう
夏至金色タイヤの破裂せし真昼
檜扇や老舗に残る備忘録

雨村敏子

齋田に水を張りたる風の波
なた豆の花芽雨音聞いてをる
噴水の光の高さ水飲場
ひとつつつ思ひを重ね更衣
六月の夜目に光の濡れてをる

本多俊子

晩鐘やむらさき麦も麦の秋
言霊のただよふ楨や夏深し
たちねは此の世にひとり棉の花
水鶏笛けふの一善こころざす
空蟬のまだやはらかき雨上り

近藤喜子

蛇われに時の空白もたらしぬ
滝壺に急ぎし水の渴きかな
白靴や下ろすならシャガールの空
藻隠れに何を愁へる金魚かな
手中より声はなれゆく大夏野

瀬川公馨

夏潮や蘭陵王のひとり舞
長尺の籠を縷はむや葛ヶ原
夏瘦の迦楼羅の面と思ひきや
絵紺の日傘を贈る人をらず
つゆ鶏魚バラードに棘あるやうな

久保東海司

うすうすと虹うすうすと雲湧きぬ
睡蓮の目覺め佳きもの、悪しきもの
煌々と流燈 百が堰を落つ
さし卸す日傘の柄に合はず服
まひまひのしばらく雲の影に憩ふ

中野京子

透明な時の流れや花は葉に
父母や虚空の道の美しき虹
ゆるやかに茅花流しの離陸かな
万緑や下校の子らの傘の花
七月の扉ひらかれ喜寿の朝

柳川 晋

練達の顔なり新酒火入れして
蛇皮を脱ぎ肩凝りのなき世界
人生に待つこと多く明易し
山姫に連れてゆかるる形代ぞ
緑蔭を離れたがらぬ哲学者

岩下芳子

立腹の夏大根を卸しけり
じやりじやりと車のくぐる大茅の輪
湖の底まで届け 大西日
列島を縦に貫く夏の山
尾上なる夏鶯となりにけり

近藤紀子

竹中一花

誕生月ことなく過ぎし柿若葉
花模様の傘に梅雨入の音を受く
通ひ慣れし代田の畦を母がりへ
夜目に白く十葉咲きし時かな
十葉の花砥部焼の片口に

すててこの座る椅子なり日曜日
あやめ風葉書運びて来たりけり
病棟に愛宕の風と朱夏の花
針槐繪筆の先に川の音
北斎展日傘の列のしんがりに

岩月優美子

蛇の衣夢の世中途半端なり
万緑に吸ひ込まれゆく魂あまた
花栗の香や修羅道へ迷ひ込む
無我の境破りし蟾の太き声
白南風や流木ときにアートなり

槐市集

柴田靖子

緑陰も色深まりて大海原
雲も水も淀みなくあり額の花
優曇華や心して日々送らんと
十葉も干され色失せ青き空
淋しさの鮎の背にある瀬波かな

庄司久美子

雲の峰をんなの囲む駱駝かな
噴水やロダンの像を覗きける
一心や蟻の門渡り神がかり
水槽のはんぎきの目や鬼瓦
石畳の先は教会含羞草

杉原ツタ子

青虫の機嫌伺ふ首夏の庭
円墳の木々のざわめきはた神
まなじりも梅雨の晴間や如来像
四葩咲く観音像の掌
利休梅丸太普請の茶室かな

鈴木初音

梅雨の月ここぞとばかり奥に入る
青空の寂しき極み閑古鳥
手厚かる神のもてなし茅輪かな
引き寄せて枇杷挽ぐ人のよるめけり
老鶯の谷渡る時橋渡る



高野昌代

十葉を吊す軒端の竿長し
煙^{のろし}峰とも噴煙あぐる山開
待ちぼうけ駅舎の水柱の丸くなる
なんとまあ虫食む一樹の丸裸
空碧く一刷毛塗りて梅雨あがる

田中信行

郭公や開く朝刊読書欄
麦の秋新婦の父の涙かな
梅雨空に雨傘アート創りたる
梅雨晴れ間猫にせがまれ窓を開け
聖堂に三筋の光半夏生

谷岡尚美

剥き残る新諸にある皮の色
慈しむ母のあぢさゐ今盛ん
流れ橋に葎切を追ふ夕日影
掌に一瞬乗るや初螢
梅雨満月夕陽ヶ丘のシルエット

寺田すず江

有葉や押へ込まれし天邪鬼
朝焼けに青き地球の胎動す
道程は知らず厭はず蟻の列
哀しさを秘めて熟れけり蛇葺
音たてて線香火花潰えたり

時澤藍

京鹿の子年増に似合ふ色好み
雷の臍の様なる梅干して
繰り言は詮無きものよ沙羅の花
さつぱりと刈られて麦秋終はりけり
スリッパのつま先軽き更衣かな

中貞子

梅雨晴間地元の富士の雄姿かな
無花果や健脚なるを褒めらるる
青柿の落つや飛び出し注意札
無花果に寄つて集つて黄金虫
木下闇に将棋の駒の音高し

槐集

高橋将夫選

六月がはじまる雨の匂ひして 大阪 有松 洋子

ふと魂たまのぬける心地す梅雨の月

列島を淡く包んで梅雨深む

分け入るは神のふところ山開き

雲湧いて沖の明るき海開き

前方の明るきことも木下闇 枚方 熊川 暁子

蒲刈られ水の景色を失くしたる

知恩院 七万坪の青葉風

河童忌の何も起らぬ藪の中

青あらし十二神将みな怒る

黒揚羽沈黙にある存在感 大阪 江島 照美

脱ぎ捨つる過去の執着竹の皮

振り花戻せぬこともありにけり

純白の可憐な異端紫蘭吹く

家といふ枷の重さよ蝸牛

言霊を掴みそこねて梅雨に入る 岡崎 犬塚李里子

無心なる安らぎにあり草を引く

夏霧の晴れていのちの透きとほる

菖蒲湯やたまゆらの世を忘じけり

信濃路や夢には非ず青き芥子

億年の水脈曳き夏の大三角 寺田すず江

虚も実も閉じ込め蚩袋かな

海昏れて枇杷に明るさ漂ひぬ

動かずば化石になるぞ山椒魚

捕食する守宮の足裏盤石に

秀吉の戻り来し道葵咲く 寢屋川 前田美恵子

緑陰をぼつかり開けてバス発てる

夏草や羊追はるる地平線

肺魚ぢつと動かずにゐる夏の隅

あべかはを食してをりけり日の盛

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

分け入るは神のふところ山開き 有松 洋子
山開きに山に登ったという景。それを「神の懐に分け入る」と捉えたところが素晴らしい。多くの山は御神体で信仰の対象になっている。山に入ること、まさに神の懐に入ることなのだ。作者ならではの着眼といえる。

〈六月がはじまる雨の匂ひして、ふと魂のぬける心地す梅雨の月〉の句にみられる感性もまた作者ならではのもの。それでいて誰にでも理屈抜きに素直に受け入れられる感性であろう。

蒲刈られ水の景色を失くしたる 熊川 暁子

蒲が生い茂った水辺の景。蒲が刈られて水だけの景になった。作者にとつては蒲があつての水辺の景なのに、それが刈られてしまつては、もはや「水の景色」でなくなつてしまつたのだ。〈前方の明るきことも木下闇〉の句では、闇でなく前方の明るさに着目したところが非凡。〈知恩院七万坪の青葉風〉の句には堂々とした風格がある。

振り花戻せぬこともありにけり 江島 照美

覆水盆に返らずというが、世の中には元に戻せぬことがたしかに多い。いつそのこと元に戻さずにおく方がいいのかもしれない。振花は振れたままにしておくか。

〈脱ぎ捨つる過去の執着竹の皮〉の句のように、執着はさら

りと脱ぎ捨てたい。〈純白の可憐な異端紫蘭咲く〉の句にある白の紫蘭はたしかに異端といえるが、「可憐な異端」と言ったところが、いかにも作者らしいと思う。

無心なる安らぎにあり草を引く 犬塚李里子
暑さも忘れて無心で草むしりをしている。そんな時にふと心の安らぎを感じたという。いやいややっていたら、ますますいやになる。なんでも夢中でやれたらどんなにいいことか。

動かずば化石になるぞ山椒魚 寺田すず江
山椒魚は生きた化石。このまま動かないでいると、それこそ本当の化石になつてしまふぞと警告するあたりが俳諧。

夏草や羊追はるる地平線 前田美恵子
放牧の羊の群れが追われて、はるか地平線のかなたに消えていく景。雄大でアルプスを思わせる。

木の匂ひそのまま残し青林檎 中田 禎子
青林檎に木の匂い…実に新鮮な感性だと思う。

干しぜんまい日和続きの深山かな 谷岡 尚美
うららかな春日と干したぜんまいと山。故郷の昔を思い出させる景である。

天壤無窮植田の濁りすみ青む 鈴木 初音
天壤無窮とは天地とともにきわまらないことをいう。濁りの澄んだ植田はまさにその具象化。

(以下略)